

REMINISCENCES

私の研究歴

琉球大学 医学部第一外科

西巻 正



昨年4月より琉球大学第一外科を担当しています西巻です。この度本誌への寄稿を依頼されました時、自分の非才を思い承諾を躊躇しましたが、私と琉球大学第一外科を知ってもらう良い機会と考え直して筆を執った次第です。

現在私は食道癌の外科治療を専門にしておりますが、大学を卒業して外科医を志した頃は今の私を想像すらしておりませんでした。

私は昭和54年新潟大学を卒業し、直ちに新潟大学医学部外科学教室の門を叩きました。今もそうですが、新潟大学の外科では最初の2年間は特定の医局に所属せず、呼吸器外科、心臓血管外科、消化器・一般外科、小児外科をローテートし、その後自分の専攻分野を決める研修体制をとっておりました。当初私はどこか華やかなイメージがあった心臓血管外科に興味を持っていましたが、実際の診療に携わるうち、自分が執刀できる機会が多い消化器・一般外科に魅力を感じ、武藤輝一教授が主宰されていた第一外科に入局しました。

いずれは大学のスタッフとして外科学の研究に携わりたいと思っていましたので、入局と同時に大学院進学を願い出ました。私自身は外科の初期研修時に興味を持った肝・胆・膵疾患の生化学を勉強したいと希望していましたが、主任教授の武藤先生からは自分の専門分野である胃潰瘍と胃炎の病理形態学を、九州大学から新潟大学第一病理

の教授に赴任したばかりの渡邊英伸先生のもとで研究するよう指示されました。自分の希望は叶わず、対照的に志望通りの専門分野に次々に配属されてゆく同期生を羨まざりませんでした。

気が進まないまま第一病理学教授室のドアをノックしたのは、昭和56年の4月でした。若い私は医学部教授との面談に大変緊張していましたが、渡邊教授は予想外にも気さくな言葉で病理学の夢と可能性を熱っぽく語ってくれ、感銘を受けて教授室を後にしたことを思い出します。それまで重くのしかかっていた不満と不安が霧消し、明るい希望が湧き上がってくるのが分かりました。病理学なんて発展性のない過去の学問だと思い込んでいたのは、ただ無知以外の何物でもありませんでした。

当初渡邊教授は胃潰瘍の病理にあまり関心はなく、私には教室の研究テーマの一つである胃癌の病理を研究させたいと思っていたようでした。しかし、私は第一外科の大学院生でしたので武藤教授の意向を無視するわけにもいかず、九大時代から研究していた「悪性サイクルを呈する胃癌の進展に及ぼす粘膜下層繊維症の効果」を私の研究テーマに選んでくれました。

病理学教室には2年お世話になりましたが、臨床の教室にはない自由で風通しが良い雰囲気の中で、多くの先生から学問の初歩を学びました。顕

微鏡下に広がる錦絵のように美しいHE染色切片を飽きることなく観察できた2年間は、最も充実した時期だったと思います。

渡邊教授から戴いた研究テーマの下準備のつもりで始めた良性消化性潰瘍の病理を研究するうち、いくつか新しい知見が見つかり、幸いなことにそれを学位論文に仕上げることができました。問いかけながら標本を見ていると必ずアイデアが湧いてくると日頃渡邊教授が口にしていたことが、何の変哲もない胃潰瘍の標本を注意深く観察してゆくうちに実感させられました。

本当に瓢箪からこまのように消化性潰瘍に関連するテーマで数編の論文を発表することができたわけですが、その一方でやはり胃潰瘍の組織学的研究に限界があることは感じていました。そして私の関心は、胃潰瘍・胃炎から胃癌へと移ってゆきました。

病理から外科に戻ったある日、思い切って武藤教授に今後は胃癌の外科病理を研究したい旨を願い出しました。今思えば、武藤教授は私に消化性潰瘍、胃炎の超微形態学を担当させたかったはずですが、直ちに私は“潰瘍グループ”から“癌グループ”に配属替えになりました。

当時新潟大学第一外科の癌グループは乳癌、甲状腺癌、食道癌、胃癌の診療と研究を担当していました。癌グループに移ってからは胃癌の臨床病理を研究していましたが、ある時癌グループのチーフをしていた佐々木公一講師から、おまえはこれから何を研究してゆきたいのかと尋ねられました。私は将来の研究範囲をできるだけ狭めたくなかったので、胃癌と食道癌をやらせてくださいと答えましたが、どちらか一つに決めろと言われて即座に食道癌を選びました。

癌グループには胃癌の病理を研究している先輩は何人もいたのですが、食道癌の病理を専門に研究している教室員は1人もいなかったのが、その選択の理由でした。確かに食道癌の大多数を占め

る扁平上皮癌の組織は、多彩な胃癌の組織と違って単調で退屈に思えます。しかし、自分以外に食道癌の外科病理をやる人間がいなれば、この分野であるいはチーフとして活路を拓くことができるかもしれないと考え、決断したのです。

昭和63年、新潟大学第一外科が第88回日本外科学会総会を担当することになり、まだ医員だった私にも学会運営の役割が割り付けられました。当時次第に名前が売れてきた新進気鋭の少壮外科医、シーベルト教授が招待講師として西ドイツから新潟に来ることが決まり、その接待役に私が指名されたのです。

シーベルト教授とともに数日過ごしましたが、だいぶ打ち解けてきたある時、自分は将来食道癌の外科をやりたいと思っており最近欧米で増加しているバレット食道に大変興味を持っていると雑談のつもりで話したところ、それでは自分のところに勉強に來い、自分は今国際食道疾患会議(ISDE)の留学奨学金委員会の委員長だから便宜を図ってやろうと言ってくれたのです。この願ってもない申し出に即座に決断し、シーベルト教授がいるミュンヘン工科大学附属病院に留学することになりました。

翌平成元年、家族を伴って西ドイツのミュンヘンに渡り、約1年ミュンヘン工科大学附属病院でバレット食道と食道腺癌の病理を研究しました。バレット食道は胃炎の組織像と、バレット食道癌は胃癌のそれと極めてよく似ており、新潟大学で学んだ病理学が研究を遂行する上で大いに役立ちました。

ミュンヘン工科大学附属病院における私の指導医はヘルシャー講師でしたが、彼と研究成果を論文にまとめる作業を通して西欧人の思考形式を垣間見ることもできました。ヘルシャー講師はその後ケルン大学の外科主任教授となりましたが、それを目指して過酷なストレスに耐える彼の姿が帰国してからは私の鑑となりました。

帰国後しばらくして助手に採用され、ようやく腰を落ち着けて本格的に食道癌を研究できるようになりました。その後、新潟大学第一外科の講師、次いで助教授を務めました。私の研究手段である病理形態学を生かして今日まで食道癌の進展特性とそれに対応する適切な切除・郭清術式の研究を続けています。

途中、文部省在外研究員として渡米し、コーネル大学附属メジカルセンター、テキサス大学附属MDアンダーソン癌センター、南カリフォルニア大学外科教室を訪問する機会を与えられ、米国の食道癌治療に携わる外科医達の本音を探ることもできました。彼らの考え方をすることは、新たな研究分野に目を向けるだけでなく、慣れない英語

での発表方法を向上させるうえで大いに役立ちました。

冒頭に述べましたように、昨年平成14年4月新潟大学から琉球大学に異動となりました。琉球大学第一外科は少人数ながら消化器外科だけでなく内分泌外科、小児外科も担当しています。少ない人数で広い診療範囲を受け持ち、研究成果も求められる現状はなかなか厳しいものがあります。琉球大学医学部は最も後発の新設医学部ですが、第一外科の主要な研究分野を外科腫瘍学として、小さくともきらりと光る教室になれるよう努力してゆくつもりです。今後とも琉球大学第一外科にご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



琉球大学医学部全景